トラブルバスター　矢神理佳

カンダユウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラブルバスター　矢神理佳

【Ｎコード】

Ｎ０３９３Ｆ

【作者名】

カンダユウヤ

【あらすじ】

学校で唯一茶髪が許された女子高生、矢神理佳。彼女は無類のトラブル好きで「トラブルバスター」と呼ばれている。その彼女が巻き起こす騒動。トラブルがあるところ、ヤガミリカあり！

トラブルバスター　ヤガミリカ

トラブルバスター　　ヤガミ　リカ

ここはとある町。とある県立高校に起こった事件を話そうと思う。内容は、ごく単純な盗難事件から始まる珍騒動。ある一人の生徒によって事なきを得たのだが、その主役の登場から始めることとしよう。

梅雨の中休みに入ったその日、気温が３０℃近くまで上昇した午後のこと、一年生の男子生徒が持っているはずのＭＤウォークマンが盗難された。

場所は男子更衣室。その時間、その生徒は体育の時間で更衣室を利用した後部屋を出た。時間帯は、授業が始まる５分前から生徒が戻るまでの５５分。その間に誰かによって盗まれたのだった。

事件が発覚したのは、次の授業の始まる前の事。校内に放送が入り、抜き打ちの持ち物検査をすることになった。その後は想像の通り、生徒全員のブーイングの嵐が校内に起こる。

無理もない。蒸し暑く、勉強に身の入らない時間帯に持ち物検査なんて、カッタルイに決まってるはずだ。他の生徒だってマンガやウォークマンを持って来てるわけだから、いい表情（かお）はできるわけない。

それで濡れ衣を掛けられでもしたら、一挙に反感を買ってしまうだろう。

そして、ここは2年のあるクラス。

当然、そのクラスも持ち物検査が行われ、一人一人の持ち物をチェックしていた。しかし、ある一人の生徒だけ席が空いていた。

「おい、この席のヤツどこへ行ったか知ってる者いないか？」

「先生。多分、屋上で昼寝でもしているんじゃないでしょうか？」

発言したのは、このクラスで学級委員を務める男子生徒だった。
「また昼寝かアイツ（・・・）は。まったくしょうがないヤツだ」
その生徒の事を十分に承知しているのか、その初老の教師は若い副担任の教師にクラスを任せ、屋上へと呼びに行く事にした。

屋上。
この高校は、４階建ての校舎で創立１５年を迎えた比較的に新しい校だ。屋上には安全のため防護ネットが張り巡らされ、環境については問題ない。そのため、屋上のちょっとした日影で昼寝することだって可能だ。
あまり健康そうでない汗をかいた担任教師は、カンカンに照りつける屋上で暢気に昼寝をする生徒を見つける。
「コラッ、矢神！　お前、また昼寝しているのかっ！　こんな時によく寝ていられるな！」
怒鳴り声で起こされた生徒は、英語の教科書を片手に眠い目を擦りながらゆっくりと起きる。
「なんだよぉ～人がせっかくいい気持ちで寝てるのにィ～。急に起こさないでくれる？」
前髪を「の」の字にいじくる生徒は、真剣に教師の話を聞こうとしない。
「何が、急に起こさないでくれるぅ～だ。場所を弁えんか」
滴り落ちる汗をハンカチで拭い反論する。
「フンだ。こんなアッチ～日に授業なんて受けてられますかって」
あくまでも暑さを理由に行こうとしない。
「授業じゃない、理佳。ちょっとした事件があったんだ。お前も教室に戻れ」
「じっ、事件！　なんか面白そう」
目の色を変えた理佳は、やっと行く気になったらしく、長い茶色がかった髪をヘアゴムで束ね屋上を出る。
彼女は、この校で唯一の茶髪を許された生徒である。別に染めて

いるわけではないが、生まれながらにして髪が茶色がかっている。
外見、どことなく可愛らしく映るのだが、生まれついてなのか定かではないが皮肉っぽいところがあり、小悪魔的な存在としてこの校では知られている。それは、彼女がトラブル好きだからかもしれない。
教室に戻った理佳は、担任教師に言われるままに机上に私物を順に置いていく。
「これで全部。あとは何も持ってませ～ん」
机の上には教科書が2・3冊。その他に、筆記用具や小パックのお菓子。それに、赤と緑のヘアゴムが2本。最後に出てきたのは、MDウォークマンだった。
「これ、もしかして盗まれたMDウォークマンじゃないのか！」
担任教師のとても大げさとも言える発言に、クラスの視線が瞬時にして理佳に向けられ、あまりに合っている動作に身じろぎしてしまう。
「ちょっ、ちょっとなんだよ。あたしが盗んだとでもゆ～のかよ？！　待てよ、このMDウォークマンはあたしのだって。ほら」
ウォークマンを手にする担任から乱暴に取り返すと、真裏に書かれた文字をクラス全員に見せ付ける。
「ほら、ここにR・Yって書いてあるだろ。だからこれはあたしのなんだよ」
再度確認をした教師は理佳にウォークマンを戻すと、クラス全体を静かにさせるため教卓に立つ。
「よし、これで持ち物検査を終わる。矢神、疑いのかかるようなモノを持って来るんじゃないぞ」
「ヘイヘイ、分かりました」
「これで終わる。少しの間、自由にしていていいぞ。解散」
担任の号令によってクラスの全員が次の行動に移る。理佳は脇目もふらず出て行こうとする担任を捕まえる。
「あの～せんせ……」

妙に気だるいテンションに、担任は何かに気付く。
「矢神、お前まさか……やめておけ、今回はマズ過ぎる」
「何でだよ～っ。こんな時こそあたしの出番じゃん」
小声で口論を交わす二人。
「出番といってもな［トラブルバスター］のお前が首を突っ込むと、余計なことしか起きやしない」
「なんでそうと決め付けるんだよ。犯人が見つかりゃぁそれでいいじゃん」
生徒と教師、二人だけのヒソヒソ話。別に悪いコトについての話ではないが、その光景を見る限りでは何かあるのではないかと思ってしまう。だが、クラスメイトもまたその光景を見慣れているのか見てみぬ振りをする。
「犯人を見つけることについては一向に構わないが、そこに至る手段について校長から注意を受けたばかりだ……う～む、分かったいつも通り早退扱いにしておく。細心の注意を払って捜すんだぞ」
「大丈夫、任せておけって」
「いいか、何があっても問題を起こすんじゃないぞ」
「わっかりました、センセ」
［トラブルバスター］矢神理佳は担任にウインクして見せると、後ろを向き茶髪のポニーテールを揺らしウキウキ気分で教室を出て行く。
『はぁ～っ、また問題が起こった日には減給されるだろうな……』
ため息をつき、理佳を見送る担任教師の目はどこか虚ろだった。

1話：前半終わり

トラブルバスター　ＫＥＴＳＵＭＡＴＳＵ（前書き）

校内で起きたＭＤウォークマン盗難事件を追う理佳。
新聞部の祐樹の協力を得て、関係者から事情を聴きまわる。そして
理佳は、犯人を突き止めることに。

トラブルバスター　KETSUMATSU

トラブルバスター　ＫＥＴＳＵＭＡＴＳＵ

［トラブルバスター］こと矢神理佳は、何を隠そうこの高校に唯一存在する何でも屋である。これは金銭を目的としたことではなく、単に面白ければいいと言うだけで困った事件や問題を解決している。

だが、彼女一人では全てを解決することはできない。そのため、彼女の言う［情報屋］の協力が不可欠となる。

「お～いっ、情報屋、いるか～？」

理佳が訪れたのは、校内に週一回校内新聞を張り出している新聞部の部屋であった。新聞部は、校内で言うところの［裏通り］と呼ばれる最も日当たりの悪い場所にあり、めったに人が通らない所として知られている。

「よっ、ようトラブルバスター。今日は来るのが早いな」

出迎えたのは、理佳とあまり身長の変わらない男子生徒だった。銀縁眼鏡を掛け、全身からドヨ～ンとしたオーラを漂わせ根暗な印象を与える。

「相変わらずくれぇ～なぁ～この部屋。それに、祐樹あんたも」

「しょうがないだろ。この暗さは元からなんだ、文句を言わないでくれ」

喋りも暗い祐樹は、ズレ落ちるメガネを押し上げ室内へと招き入れる。

薄暗い室内のライトを点け、手近な場所にある椅子に座る。

「それで、今日来た目的は？」

「それにしても、くら～い部屋のわりにキレイにしてるよな」

「無意味に暗くはしていない。写真を現像するためだ。それよりも、ここに来たってことは何かあるんだろ？」

室内を見渡していた理佳は、急に振り向き得意気に切り出す。

「そう、その通り。知ってるだろ、今日の盗難事件」
そうと来ましたとばかりに、祐樹は不適な笑みを浮かべメガネを上げる。
「ああ。そう来ると思って調べておいたさ」
「それで被害者は？」
Ｂ５ぐらいの大きさの紙を何枚も取り出し、祐樹は読み始める。
「被害者は一年Ｃ組、出席番号８番片山保紀。天ヶ城中学出身。身長１６８・２ｃｍ。体重５６・７ｋｇ。推薦で入学。得意教科は生物・地理。不得意教科は国語」
「相変わらず抜かりがねぇなぁ、下調べ」
部室に飾ってあるパネルを鑑賞しながら、理佳は至極冷静にしかも当然のように聞いている。
「それで、ソイツと仲悪いヤツはいんの？」
祐樹に背を向ける理佳は、暗幕に手をかける。すると紙をめくる音がする。
「えっと、仲の悪いヤツは二人いる。一人は、同じ中学出身の戸田正希。それから、クラスメイトの速水聡。二人とも保紀よりも勉強のデキが悪いというところで憎んでいるらしい」
次の瞬間、暗幕を思いっきり開けた理佳は、目に飛び込んでくる陽射しに目を細める。
「よぉ～し、明日その二人に当たってみるか。情報料はいつも通りってことで」
「分かった。なぁ、相談なんだが、今度部で［トラブルバスター］に関しての新聞を作成しようと考えてるんだが……」
書類を素早く片付けた祐樹は、息をメガネに吐き掛け磨く。
「え～っ、あたしのこと？　う～ん、もしいいって言ったら何か見返りはあんの？」
「お望みのものをやろう。しかし、限度があるけどな」
「じゃ～ね～、あたしがＣＤが欲しくなったら買ってくれるって事でいい？」

理佳も乗り気になったらしく、祐樹に要求を告げる。一瞬、メガネを拭く手が止まったが「解った」とばかりにメガネを掛け直す。
「交渉成立だな。でも、条件として今回の件がうまくいったらな。それでいいだろ？」
「分かった。まったく、お前と関わると火の車だよ」
微妙にずれた焦点を合わせていると、祐樹はいきなりもう片方の手を理佳に差し出す。
「何？　手相を見て欲しいの？」
「弁当代」
「はぁ～あんたって、食うことしか頭にねぇのかよ？」
無表情の［情報屋］に、理佳は呆れ顔で５００円硬貨を渡した。

次の日、理佳は［情報屋］から得た情報のもと、被害者の片山保紀を尋ねた。
「あんたね、ＭＤウォークマンを盗まれたってのは？　あたし、矢神理佳。人呼んで［トラブルバスター］よろしく」
突然現れた見知らぬ少女に、保紀は少し怯えた表情を浮かべる。
「何ですか、僕に」
「あのさ～昨日のＭＤウォークマン盗難事件について聞きたいんだけど、付き合ってくれる？」
今日は赤いヘアゴムを使ってポニーテールを括り付け、朝の早いうちに事情を聞くことにした。
「えっ、いいですけど……」
そして、連れて来られたのは屋上。朝の間もない頃、空気がまだ澄み切っていて清々しい。だが、さすが夏という事で気温は上昇し、熱い陽射しが雲の間を突き抜けて差し込む。照りつける屋上は、鉄骨の影響からか地上よりも暑い気がする。
「そっ、それで盗難の何から話せばいいんですか？」
防護ネットを軽く摘みながら、保紀は暗い表情で下界を見下ろす。
「いや、別につまんないことなんだけどね。あんたの持ってたＭＤ

と、あたしのヤツがそっくりなんだって。それで、担任のヤツがさぁ間違ってあたしの事を犯人扱いしてね、あん時はヒヤヒヤしたぜ」
得意気に、理佳は保紀の周囲を歩き回る。本当の目的をあえてはぐらかし、話を逸らしていた。
「そんなことがあったんですか……すいません、僕の不注意で迷惑を掛けてしまって……それより、一体誰なんだよ、僕のウォークマン盗ったの。大切なものなのに」
「でさ、この学校に来てダチはできた？」
側に寄り、理佳は俯く保紀の肩をポンと叩く。その衝撃で、我に返ったかのようにビクッと顔を横に背ける。
「どうしだんだよ、ダチはいねぇのか？」
「いえ、そんなことはないですけど……ちょっと、ケンカ中なだけです」
保紀は答えにくそうに言葉を濁し、寂しげにまた俯く。
「そうなのか～あたしてっきりその友達が腹いせに盗んだのかと思った」
はっとする保紀。顔を上げ振り向くと、そこには理佳の姿はなく出入り口へと向かっていた。
「悪いね～こんな時間に呼び出しちゃったりして」
ご自慢のポニーテールと後ろ手を同時に振りながら、去っていく理佳。その様子を、保紀は必死に声を絞り出そうと試みるが、結局無言のまま見送った。
屋上を出た理佳は、訝しげに考え込んでいた。
『やっぱ、犯人はアイツに違いない。けど、何でしたんだ？　動機がはっきりしねぇなぁ～。今度はダチに当たってみっかな』
ほぼ有限実行する理佳は、他者からの圧力をかけられようが気にすることなく、自分の道を突き進む。
その後、その日は被害者に会うぐらいしかできなかった理佳は、一通りの授業を聞き流しいち早く校舎をあとにする。

夕暮れ。
空がオレンジ一色に染まり、空のキャンパスに一筋の薄雲が浮かんでいる。その下を親子鳥が家路を急ぐかのように飛んでゆく。人々も一日の仕事を終え、一息吐こうと街へと繰り出す。
いったん家に戻った理佳は、ラフな格好で外出した。目的は、保紀の友達である二人に会うためであった。
夕映えの鮮やかな街を理佳はある場所へと向かっていた。それは、未成年を含めた若者達がよく集まり夕方から夜にかけ賑わう場所。そう、ゲーセン。
高校から一番近くのゲームセンターに目星を付け、理佳は入ってみることにした。
予想は的中した。
そこは若者達の集り場所となり、多くの血気盛んな若人がわんさかいた。店内はさほど広くはないが、クーラーの効いた店内はどこよりも快適で退屈しないで済む。
店内に入った理佳は、人でごった返している狭い通路を歩き回り、目的の人物を捜す。時にはいらぬ問題を持ち込まれることもあるが、この辺りでは理佳のことを知っているものが多く、ケンカを吹っかける愚か者は少ない。
店内の隅々まで目を配り捜し歩く。すると、店の奥にある薄暗くなっている場所にお目当ての二人を発見する。
後ろから忍び寄った理佳は、椅子に座る二人の肩に腕を回し脅かす。
「み～つけた。お二人さん、楽しんでるかな？」
突然抱きつかれた二人は、面白いように驚いた表情をする。
「だっ、誰だよあんた？！」
「ほっ、補導の人かと思った」
ほぼ同時に振り向いた二人を、理佳は無理矢理に入り頭をすり寄せる。
「何だよ、その気のきかないセリフはって、んなことはいいから、

ちょっと外で話そうよ。いいことしてやっからさ」
強引に連れ出そうとする理佳に従い、二人は渋々店の外へ出る。
近くの路地に入った理佳は、何がなんだから分からないままの二人に問い掛ける。
「んでさ、片山保紀ってヤツ知ってる？　知らないって嘘ついても、こっちはもう調べてあっからちゃんと答えろよ」
壁に片手を突き、理佳は堂々と確信を持って言う。
「それであんた、何の用なんだ！？」
理佳よりも頭一つ背の高い男、速水聡が少しイヤそうに吐き捨てる。
「さっきも言ったろ？　お友達の保紀君について聞きたいの」
「……アイツは最低だ！」
突如、もう一人の男、戸田正希が転がった空き缶に憎しみを込めるかのように蹴り飛ばす。路地をのた打ち回り、金属音が余韻を残して消えていく。
「最低って、どういうこと？」
核心に迫るべく、理佳は表情を引き締める。
「アイツのしてきたことが最低なんだよ……」
（中３の夏。俺と聡と保紀とで夏休みにあった全国模試を受けに行ったんだ。その時、３人の中で一番頭が良かった保紀が言ったんだ。
「よし、今回の模試で一番良かったヤツに一番悪かったヤツが好きなものおごるっていうの、やろうぜ」
とか言い出したんだ。その時、遊び半分で乗っちまったんだけど、今になって乗らなきゃ良かったって後悔してる。
ビリになりたくなかったアイツは、コソコソとカンニングをしてたんだよ！
堂々と模試の最中に。結果が届いた時、案の定、保紀が一番だったよ。それで、保紀はこう言ったんだ。
「ど～だ、ざまぁ見ろ。お前らとは別格なんだよ。さぁ、約束通り好きなものをおごってもらおうか。そうだな、ＭＤウォークマンで

も買ってもらおうか。もし親とか学校に言ってみろ、お前らの所に知り合いのヤクザに頼んで行ってもらうからな」
　なんてぬかしたんだアイツ！　俺、怖くて親に頼み込んで小遣いを前借してなんとか買ってやったよ）
「ひゃぁ～ひっでぇヤツだな」
　壁にもたれ掛かりながら、理佳は過去のエピソードに耳を傾けていた。
「それからしばらくして高校生になった時、たまたま保紀が隠れてケータイ電話を掛けてるのを聞いたんだ……」
（よかったぜ、あの事バレずに済んで。アイツらバカだよなぁ～俺がカンニングしてたの気付かないなんて。まぁ、結果的に良かったけどさ。今度は期末テストでも賭けるか）って言ってやがったんだ」
　悔しそうに、聡はギュッと拳を作り壁に叩きつける。
「それでどう思った？」
「ムカッ腹を立てたよ。でも、それが原因で事件を起こしたなんてなったら退学にされちまう」
「だから俺達は我慢したんだ。何事もなかったかのように振る舞ったんだ」
「フ～ンなるほどな。参考になったよ、協力あんがと」
　全てを聞き終えた理佳は、しっかりと立ち直ると徐に何かを握り締め、去り際二人にそれぞれ投げ渡す。それを二人同時に受け取り見てみると、何の変哲もない１００円玉だった。
「なぁ、これがいいことなのか？」
「ああ。それでゲーセンでも楽しみな。じゃあ～ね～」
　そう言い残し、理佳は暗い路地へと消えていった。
（やっぱ、犯人はアイツしかいない）

　次の日、理佳は担任の協力で被害者である片山保紀と、容疑者である戸田正希と速水聡を呼んでもらい事の真相を話し始める。
「ふ～っ、単刀直入に言うと、ＭＤウォークマンを盗んだ犯人は、

片山保紀！　お前だ」
薄暗い一室の中、理佳は保紀を指差した。
「どっ、どうして僕が……」
「そうだ、なぜ彼が犯人なんだ。彼は被害者なんだぞ」
担任が問い掛けるが、理佳は淡々と事件の全貌を話し始める。
「はぁ～あたしは探偵とは違うから、中間の事を省いて話すね。犯人の動機は、容疑者である二人に罪を擦り付けるために犯行したんだ。自分を恨んでることに気付いた犯人は、自作自演で犯罪を起こし疑いの目を向けさせて苦しめようとしたって訳」
自信満々に、理佳は精神的に追い詰めるように保紀の周りをゆっくり歩く。
「どうして、そんな事をする必要があったんだ？」
「それは本人に聞かなきゃ分かんないよ。なっ、保紀君？」
担任の教師からの問い掛けに、理佳は保紀の背後に立つと背中を両手で突き飛ばす。
「なぁ、どうしてなんだ。俺達に罪を負わせて何がしたかったんだよ？」
信じられなさそうに尋ねるのは速水聡。
「こっ、怖かったんだ……誰かにあの事を告げ口したんじゃないかって。俺、そう思ったから今回の事件起こして、これ以上何もされないようにしたんだ」
この発言に、教師と親友であった二人は驚きを隠せない。
「そんなつもりで、お前はこんなことを起こしたのか。お前、人間として最低だ！」
すると、これまで沈黙を保っていた戸田正希が蓄積した鬱憤を晴らすかのように、保紀に殴り掛かる。
「ちょい待ち。お前が殴る必要はねぇよ。やめときな」
殴ろうと構える正希を制した理佳は、真犯人を自分の方に向かせ突然！
パチン！

振りかぶった理佳は、手首のスナップを効かせ保紀の頬にビンタを放つ。
もろに受けた保紀は、倒れるかと思わせるほど体をグラつかせるが何とか持ちこたえる。叩かれた方の頬を押さえながら理佳の方にゆっくりと向く。
「あたしを含めて、イヤな目にあった奴らの分だ。自分のしたことをしっかり自覚するんだな」
肩越しに保紀に投げ掛けると、軽く肘で小突き部屋を出て行く。

その日の昼休み。事件が解決した理佳は、いつも通り屋上で涼んでいた。そこへ、場違いとも思える人物が尋ねて来た。
「よぉ、今回の事件、片付いたようじゃないか」
夏にも関わらず長袖のYシャツ姿で現れた新聞部の祐樹は、何事もないかのように話しかける。
「んっ、ちょっとばっか強引に片付けちゃったけど、丸く収まってよかったぜ」
相変わらずポニーテールにしているヘアゴムを外した理佳は、茶髪の髪を風になびかせていた。遠くに流れる入道雲の固まりを眺め、ぽつりこぼす。
「ということは、新聞を発行してもいいいてことだな？」
待ってましたとばかり、祐樹は素早くメモ帳とペンを取り出す。
「あっ、取材しようとしても、あたしパス。取材するなら、あたしンとこの担任の所に行ってよ。あたし、どうもそういうの苦手でさ」
背を向けたまま、理佳はそれとなく手を振って拒否を示す。
「フッ、お前が嫌って言ったときは、何も聞かないからな。分かった。そうする。じゃあ、おくつろぎの所邪魔したな」
手にしていたメモとペンを隠し、メガネの位置を調整した祐樹は煙のように静かに去る。
「あ～っ、いい気分だぜ。また面白いこと起きっかなぁ～」
雲のそのまた先にある雲を見ているかのように理佳は、手を後頭

部で組み寝っ転ぶ。吹き渡る心地いい風に身を委ね、満足しきった微笑を浮かべていた。

1話後編　終了

トラブルバスター　RETURN　前編（前書き）

夏休みというのは人の心を緩ませるもの。
学校では、乱れてしまった衣服や髪型を守らせるため規律旬間に入る。
生徒の衣服や髪型のチェックのため体育館に集められた理佳達。教師達のチェックに引っかかった生徒の中に、理佳のダチである孝介の知り合いの子がいることに気づく。その子は今まで衣服の乱れなど一切なかった真面目な子だった。その子がどうして……

トラブルバスター　RETURN　前編

トラブルバスター　　RETURN　　前半

ながーい夏休みが終わりを告げ、今日からこの学校では二学期が始まる。

夏休みの間、世間では様々な事が起き平穏無事とはいかなかった。株価の下落、水不足の心配。誘拐、首相を取り囲む政界の不振。そんな事柄が世間を賑わっていたが、そんなことなどお構いなしなのが一人いた。

「ふわぁ～あ、ガッコーなんてカッタリ～」

校門前にて、彼女は起きてから何度目になるか分からないあくびをする。

茶髪の長髪を青いヘアゴムでポニーテールを作り、勝ち気に満ち溢れている少女こそ矢神理佳だ。

別に人並みに知力が高いわけでもなく、ましてやお人好しというわけでもない。ただ、誰が呼んだか知らないが、『トラブルバスター』としてこの学校で知らない者はいなかった。トラブルがあるところに矢神理佳在りと、何だかルパンを追いかける銭形警部のセリフと同じように、現に彼女はトラブルのあるところに現れる。

「お久。ゆ～きぃ、相変わらず暗いなぁお前」

あくびの最中、理佳は新聞部の祐樹が横を通り過ぎようとしたタイミングで声を掛ける。

「お前こそ暢気にあくびなんかして大丈夫なのか。新学期が始まるっていうのに」

まるでインテリ学生のように、祐樹はメガネを押し上げる。

「あっ、メガネ変えたろ？」

「あぁ、金具が錆びて螺子がおかしくなって、それで思い切って買い換えたんだ。なかなかの高価で、前のメガネの倍したんだ。だが、

前よりも軽くなったからかなり勉強に集中できる」
少し誇らしげにメガネを自慢する祐樹。
「へぇ～そうかい。お前さんはもとからデキはいいんだし、それ以上良くなったって変わんねぇよ」
自分の学力を自慢する姿を見て、理佳は少々呆れていた。
「お前も二学期に入ったんだ、少しは将来を考えたらどうなんだ？成績あまりよくないんだろ？」
「ほっとけよ、お前にはカンケーないだろ？」
怒り気味に言い返そうとしたが、当の本人はそそくさと行ってしまう。
「ったく、おせっかいめ……でも、やっぱ考えなきゃマズいか……」
自分に残された時間がないことを考え、さすがの理佳も将来のことを考える必要性があるなと思ってしまうのだった。

新学期の始まる教室に行ってみると、クラスメイトは久しぶりの再会に夏休み間に溜まりに溜まった話をしている。そのため、普段よりも騒がしい。
「よぉ矢神、久しぶり。少し見かけない間に結構日焼けしたなぁ。何かバイトしてたのか？」
席について早々声を掛けてきたのは、一年の時同じクラスだった山野辺孝介だった。
「まぁな。浜辺でちょっとしたバイトをしたんだ。ビーチの監視員さ」
「へぇ～そりゃあ面白そうじゃん。で、どんな感じだった？」
「なかなか楽しかったよ。浜辺を歩き回るのも辛かったけど、時給はけっこう良かったぜ」
得意気にバイトの話をする理佳。
「どんな衣装で監視してたんだよ？」
ニヤニヤした表情が垣間見えたため、理佳は何を思ったのか簡単に見破る。

「警備員の服装して歩くわけねぇだろ？　キャミにショートパンツさ」
「な～んだ」
残念そうに孝介はがっかりとした表情をする。
「何だよそれ？」
「俺はさ、矢神が水着姿でも着てたかと思っ……」
それ以上聞く前に、理佳はさりげなく孝介のわき腹に肘鉄を入れ一言、
「スケベ」
そうして構内にチャイムが鳴り渡り、教室は教師を待つべくしてクラスメイトは渋々席につく。

恒例となる新学期早々の仕事といったら、まずは教室やクラスで割り当てられた清掃区域の掃除に始まる。その後、コースに従うように全校生徒がまだ残暑残る体育館に集められ校長のありがたきお話を聞く。
「はぁ～あっち……」
クラスごと列で並び、その中の後半辺りにいる理佳はぼおっとステージ上の校長を見ている。
「はぁ～やってられるかって、まだアッツいっていうのによぉ」
前に座っている孝介の愚痴が理佳の耳にも入ってくる。
「そうだよなぁ、新学期の初めくらいもっとましな事をしてほしいぜ」
固く言われ続けられている体育座りをやめ、理佳は孝介と話すためあぐらをかく。
「まったくだぜ、話なんてさ授業が始まりゃさぁできることだしさ。今日ぐらい早めに帰してほしいよな」
体を反転させるかたちで首だけを後ろに向け、孝介は学校の始めだというのにもう飽き飽きしているようだった。
『……え～夏休みが終わり、生活習慣を改めるべく明日から規律旬

間といたしまして、服装や頭髪の検査をします』
その部分だけが耳に届き、理佳と孝介は思わず顔を見合わせる。
「よっしゃ、これで時間が潰れるぞ」
「そりゃぁ潰れるけどさ、検査に引っ掛かったらどうするんだよ？」
「大丈夫さ、俺は引っ掛かんねぇよ」
「そうかぁ？　前髪がちょっと茶髪じゃねぇの？」
髪を引っ掻き回され、理佳の手を払いのける孝介。
「触んなって、ドライヤーのしすぎで焦げただけだっ」
大袈裟に言い訳をするところなど、どこか怪しく映るのだった。

校長の話通り翌日から規律旬間が始まり、それぞれ学年の主任教師を筆頭に各クラスの担任・副担任がチェックを入れる。全ては校則を順守するため、夏休みの間に髪を染めたり脱色したなど、制服を加工していないかというところまでチェックが入る。
「まわり見っと、結構染めてるヤツいるなぁ」
第一体育館に集合させられた二学年は、横二列に並び早い番号のクラスから順次教師たちの厳しいチェックが開始される。
「すげぇなぁ、一組は半分くらいが残ったぜ」
教師が離れているために、誰も注意を促す人がいなくなった生徒達はそれぞれ話をしたり制服を土壇場で直したりと騒がしくなる。
「いいよなぁ、矢神はさ茶髪を許されてるなんてさぁ」
理佳に話しかけながら、孝介はあぐらのまま検査をしている先生集団を眺める。
「それはそれ。あたしは元からこうなの」
理佳も女の子とは思えない大胆な座り方をし、残された生徒の固まりを眺めつつ素っ気なく答える。
「あっ！」
いきなり孝介が耳を突く声を上げたため、びっくりしてしまった理佳が向きを変える。
「うっせぇなぁ～どうしたんだよ？」

「杏子のヤツどうして……」
遠くを見据え唖然とする孝介。
「誰だよキョウコって？」
「杏子は俺と同じ中学なんだ。そン時は校則にも引っ掛からない優等生だったんだ。高校に入学しても変化なかったのに、どうして今になって変わったんだ……」
遠く片隅で一人他の生徒に入らず、佇んでいる杏子を見据え、孝介は素になって思い込んでいた。
「いっちょやってみたくなったんじゃねぇの？　そう思うヤツなんていっぱいいるぜ」
「違う！　杏子はそんなやつじゃない、絶対！」
断固として彼女のことを信じている孝介は、理佳に言い切って見せる。
「ははぁ～ん、お前がそこまで言い切るトコ見っと、そいつとデキてんだろ？」
顔をニヤつかせ孝介を問い詰める理佳。
「そっ、そんなことお前には関係ねぇだろ？　それより、今は杏子の方が問題だ」
動揺をしているのが傍から見て取れた理佳。だが、今のところそれ以上孝介を問い詰めることはしなかった。何せ、服装検査の真っ最中なのだから。
「早く来いよな」
やっと次のクラスが終わったものの、まだ多くの生徒が順番を待っていた。

服装・頭髪検査が終わったのは、結局授業終了の時間になってしまった。待たされた生徒達は、無駄な時間を過ごしたと顔にかいてあるかのような嫌な表情をしている。
「ったく、先公どもがチンタラしてっから、一時間無駄になったじゃねぇか」

授業の合間にある休憩時間を利用し、孝介と理佳は頭髪検査に引っ掛かってしまった杏子という娘に会うことにした。この時、理佳には何か面白いことが起こりそうで胸が高鳴っていた。
「いいじゃん、ゆっくりとお話できたんだから」
ご自慢のポニーテールを揺らし、孝介と共に杏子のいる教室へ向かっていた。
彼女のクラスへ向かう途中、廊下にある自分専用のロッカーの前に立ちすくむ杏子に気づく。
「お久しぶりの再会ってやつ？」
「バカ、ちゃかすな」
立ち止まり理佳が小突くと、孝介はぼぉ～っとしていたが、いつもの調子にコロッと戻り荒い口調で返す。
「いいか、これは何で急に髪を染めるようになったかを聞くだけだ。恋愛とか色恋沙汰とかそーゆう問題じゃないからな」
「前置きするトコ見っと、ホント、アヤシイ」
目を細め睨み上げると、孝介は咳払いを繰り返していた。
孝介に付き添う形で、理佳はその杏子という娘に会うこととなった。
「よぉ、杏子」
「あっ、その声って孝介君？」
至近距離だというのに、杏子は眉間に皺を寄せ凝視している。
「この女、何してんだ？」
不可解な行動が気になり、理佳は孝介に耳打ちする。
「杏子は生まれつき目が悪いんだ。いつもメガネをしてるから支障がないんだけどな」
「誰かいるの？」
凝視してやっとぼやけて見える視界の中、孝介と一緒にいる人が気になる。
「ああ、ちょっとしたダチの矢神理佳さ」
「こんちは」

紹介され、理佳は渋々挨拶をする。
「ごめんなさい、メガネがないものだから、顔がぼやけてしまって見えないんです」
向かい合って会話をしているものの、やはり杏子の視線はどこか定まってはいない。
「なるほど、その格好に合わせてメガネを掛けてないってわけか」
見えてないことをいいことに、理佳は外見をからかう。
「矢神理佳さんて、あのトラ・バタの？」
「なんだそりゃ、トラ・バタって？」
「知らねぇのか？　お前の愛称、トラブルバスターの略だよ」
「知らねぇなぁ～。けどよ、トラ・バタなんてさ、バターか何かの商品名かよ」
気に入らないらしくって、この様子で気に入っているなんて言えるはずがない。
「そんなことよりよ、ちょっと話があっからさ放課後、校門前で待っててくれないか？」
「いいけど、委員会の仕事があるかもしれないから、遅くなると思うけど」
「それでもいい。じゃ、また後で」
約束を取り付けただけで、孝介はそそくさと去って行く。残された理佳は、何をしていいか分からずとりあえず孝介を追うことにした。
「どうかしたのか？　いきなり行っちまうなんて」
「別に、授業が始まるんじゃないかって思っただけさ。あっ、忘れったけどよ、矢神も付き合ってくれ」
背後に目配せをする孝介。
「いいけどよ、ちゃんとケリつけろよ」
「ああ、分かってるって」
やっと長かった一日の授業が終わり、それぞれに放課後をどう過

ごすかで分かれる。清掃に行く者、下校する者、部活動に励む者。その他多くの生徒が次の行動に移る。
　どっと生徒で溢れかえる校門前で、時間を潰す孝介と理佳の二人が。いつもは授業の途中で抜ける理佳だったが、今日は真面目に全て出席はしていた。
「久っさびさに授業受けて、何か体がガチガチすんぜ」
「ホントは居眠りばっかしてたくせによ、よくゆーぜ」
　孝介は理佳の席が丸見えの場所にいるため、本当はどうなっていたのかは知っていた。
「来ンのかねぇ、杏子さんは」
「ああ、来るとも。杏子は約束を破ったことはないんだ」
　そんな確証どこから来るのかと理佳は思ったが、その理由が二人の過去に隠されていると一人考えていた。
「杏子が髪を染めることを考えると、深刻な問題を抱えてそうだな……」
「やっぱ、お前ら付き合ってたろ？」
　視線を、残暑が残る霞がかったような空を見上げる。
「しつけーぞ、杏子とはそんな関係じゃねぇよ。単なる友達さ」
　大袈裟に関係を否定した孝介だったが、理佳は確信を持っていた。
「おっ、来たぜ」
　校門の出入り口にちょうど視線が行った時、通学用の黒革の手提げカバンを持った杏子が現れる。
「よっ」
「あっ、待ってたんだ。いなくなったから先に行ったかと思った」
　はにかんだ笑みを浮かべる杏子は、先ほどとは違いメガネを掛けていた。その姿を見た理佳は、思った以上に茶髪に黒縁メガネは合わないと痛感してしまう。
「話って何？」
「アンタに、聞きたいことがあるんだと、なっ、山野辺？」
「あっ、そっ、そうなんだ」

少々慌てる孝介に対し、何だろうと思う杏子。
この二人には面白い結末が待っていると、理佳は絶好のチャンスに巡りあえたと内心ほくそ笑んでいた。

前半　終わり

トラブルバスター　RETURN　後編（前書き）

人の心は他人には分からないもの。伝える術として言葉や服装がある。
自分の気持ちに気づいてほしいと願う杏子。いつもと違う杏子に違和感を覚える孝介。
この二人の距離を縮めようと何やら画策する理佳。
お互いの想いは通じるのか？

トラブルバスター　RETURN　後編

トラブルバスター　RETURN　後半

それから三人は、下校途中にある小さな公園に立ち寄った。公園とはいうものの、さほど広いわけではなく普通自動車が四台ほど入るスペースしかない。土が敷き詰められ、半分には滑り台が設置され残りの半分には二台のブランコがあるという、住宅街にひっそりと佇む装いをしている。

「で、話って、何？」

背後に囲う植え込みのあるベンチに杏子、話をする孝介が寄らず離れず間隔を開けて座り、理佳は一人ブランコをこいでいる。

「お前って変わったよな。中学校の時はさぁまさにガリ勉女だと思ってたけどよ、今じゃあ茶髪でトレードマークのメガネを外してんだぜ」

どこか遠回しに言う孝介。杏子と視線を合わそうとせず上の空だ。

「ヘン……かな？」

黒革のカバンを膝元に置き視線を落とす杏子。

「まぁ、イマドキ風だけどよ、何か変なんだよな。何つうか、お前らしくないんだよな、その格好」

核心へ迫ろうと、孝介は考えられないほど真摯的な眼差しで意を決して杏子の方に視線を向ける。

「やっぱり、そう感じる？　これでも精一杯頑張ったつもりなんだけどな……」

「どうして、格好を変えようと思ったんだ？」

「私ね、好きな人がいるの。もちろん片思い。それで、振り向いてもらおうと思って夏休み中に髪を染めてみたり、慣れないお化粧を友達から教わってみたんだよ。けれど、生まれつき視力が悪いから少し挫折しそう」

自分の事なのに、杏子は皮肉な笑みをこぼす。
「そんなためにか。髪を染めていろいろやって、校則に引っ掛かることをした理由は？！」
この時、孝介の中にある杏子のイメージが音をたてて崩れていくような気がした。
「そんなの、お前じゃない！　それじゃあ、どこにでもいるような子とかわりないじゃないか！」
孝介は声を荒げ、杏子を問い詰めるかのように言い寄る。
「大丈夫だよ。表面は単なる飾りにしかすぎないし、心は変わらないから」
「そんなことあてになんかなるもんか！　イマドキなんか、うわべだけで人を判断して内面なんて見ないんだぜ！」
一方的な孝介の問い詰めに、否定され続けた杏子の瞳が潤み始める。
「なんで……どうして、孝介君はそう言うの……どうしてそんな……」
今にも涙をこぼしそうになりながら杏子は逃げるように去ってしまった。孝介は、これは杏子のためなんだと自分を慰め妥協していた。
「杏子を泣かせちまったな」
遠くから眺めていた理佳が、孝介の側に寄り肩を叩く。孝介の肩は、やってしまったという後悔が重く圧し掛かり、力がすっかり抜けきっていた。
「俺は……間違っていたのか？」
「あたしはそう思わないぜ。お前のしたことは正しい。だが、同時に傷つけたのは仕方ないことだけどさ、どうしてそこまで杏子のことを思うんだ？」
理佳の問いに、孝介はビクッと一瞬身震いをする。
「それって、答えにくいことなのか？」
諭すように、理佳は優しく語りかける。

「ただ……俺は、今までの杏子でいてほしいだけなんだ……」
やっと孝介の本心を聞け、理佳はふと安心感に包まれた気がした。それは、単なる戒めではなく杏子を心から思う、何か特別な理由が孝介の中にあると悟った。
「そうか。そうなったら、あたしが一肌脱がなきゃいけねぇな。山野辺、あたしに任せな」

有言実行タイプの理佳は、翌日から行動を開始した。何とか一日粘って頑張り、やっとのこと放課後を迎えた彼女は、久しぶりにあの場所を訪れた。
理佳が用があって訪れる場所は一ヶ所しかない。それは、校内にある通称［裏通り］という場所にある新聞部の部室だ。
「祐樹いるか～っ？」
間延びした声を張り上げ、勝手に新聞部の戸口を開けて入る理佳。中は、ライトというライトが全て点灯され、机を一つにくっつけ白い紙で覆っていた。
「今日来るとは思わなかったぞ」
平然とした様子で、新聞部の主である祐樹が入ってきた理佳に気付く。
「そんな～つれねぇなぁ～、これでもお前を信用してんだぜ」
肩を竦めてみせる理佳。そのまま、了解を得ず彼女は勝手に手近な場所にあったイスに座る。
「前置きはやめてくれ。本題を話せ。こっちは文化祭に向けていろいろと忙しいんだ」
どうだか……と、心の内で思ったが、そんなことを言いに来たのではないと思い出す。
「そうそう、忘れてたぜ。あんな、頼みがあんだ。あたしのダチでさ……」
「山野辺孝介と、日向杏子の関係についてだろ？」
いともあっさり見抜かれていて、理佳は驚きを隠せなかった。

「さっすが！　情報の速さはピカイチだな」
話が早いと思い、理佳は祐樹に近寄る。すると、彼はすかさず欲しいだろうと思っていた資料を見せる。
「つくづく思うんだけどよ、情報ってどこから仕入れてくんだ？」
資料に目を通しながら、理佳はその情報の正確さや早さにいつも圧巻してしまう。
「それは、企業秘密だ」
「企業秘密って、それでメシ食ってるわけじゃねぇのによぉ」
祐樹の秘密主義には、時々不可解な点が上がるがそんなことを一々挙げてたらきりがない。
「参考になったか？」
じっと資料を見つめる理佳を、祐樹は体を起こして見据える。その顔には、自信と確信が満ち溢れ晴れやかに映る。
「ああ、これでハッピーエンド決定だ」

翌日が休みとあって、理佳は最高のシチュエーションを計画した。もちろん、お互いは何も知らない。
幸いなことに、二人とも部活に所属していないことを知り、理佳はそれぞれに電話を入れどこそこに来てくれと言っておいた。
集まる場所として指定したのは、孝介の家からも杏子の家からも近い場所にあった小田桐神社を選んだ。
小田桐神社には赤い大きな鳥居があり、ひとつは研磨された大きな柱に文字が彫りこまれた石柱の横にあり、もうひとつは社が建てある前にあって、この界隈ではよく目印とされるとても有名な場所だ。境内には数々の木々が植樹されており、四季が移り変わるごとにその姿を替え彩る。そのため、境内の片隅には少しでも憩いの場所として使えるようにとの配慮で、木を一本ほぼ加工しない形のベンチを作り工夫を施していた。
「遅っせぇなぁ矢神のヤツ、呼び出しといてよぉ」
一足早く訪れたのは孝介だった。

辺りを見渡しても人の姿はなく、あるといえるのは、隣接する公民館で開かれている催し物で、中年世代のおばさま方が揃って入っていくのが分かった。
それにしても誰も来ない。
孝介は、携帯のディスプレイを覗き今の時刻を確認し、少し苛立ち始める。
呼び出した本人が先に待っているという予想のもと、あえて少し遅く出たというのに、ここまで待って来ないとなると騙されたのではないかと思い始めてしまう。
「孝介君？」
不意に声を掛けられ、反射的に振り向く。
「きっ、杏子！　どっ、どうしてここに？」
振り向いた孝介。驚愕の表情を浮かべる。どうしてこのような場所にいるのか、偶然にしてはありえそうにない。
「そっ、それは……じゃっ、じゃあ孝介君はどうしてここに来たの？」
「そっ、それは……」
と、この場しのぎの理由を考えている最中に、孝介の頭の中に理佳のほくそ笑む顔が現れてきた。
（もしかしたら、アイツ……）
どうして呼び出した本人が来ず杏子がいるのか？　これをどう考えても、仕組めたのは世界に一人しかいない。
「たっ、単なる散歩さ。たまには気分転換ってのもいいかなって思ったからさ」
苦笑いを浮かべ、この場をしのぐ言葉を述べる。
「そうなの……てっきり私、矢神さんに呼ばれたのかと思って」
「えっ、杏子も矢神と関係あんのか？」
驚きを隠せず聞き返すと、杏子は黙って頷く。
「矢神さんがね、『近くの神社に行けば、あんたの片思いを実らせてやるって』言うから、張り切って来ちゃった」

話を聞き改めて杏子を眺めると、自分なりに頑張ったのだろう、かなりめかし込んでいた。だが、どこか慣れていないという雰囲気を醸し出している。
「そうなのか、いよいよ告白か……じゃ、しっかりやれよなっ」
そのままやり過ごそうと杏子の横を通り過ぎようとした瞬間、突然孝介の腕を捕まえる。
「……ねぇ、行かないでよ」
「どうしてだよ、告白相手が来るんだろ？　それなのに、なんで俺を足止めすんだ？」
一向に掴んだ手を離そうとしない杏子に対し、あえて強い口調で言い聞かした。
「だって……その片思いって……孝介君だもん」
目線を下げ俯き、杏子はメガネの奥に涙を溢れんばかりにためていた。
「うっ、嘘だろ！」
孝介は杏子の発言にかなり動揺し、愕然としていた。
同じ中・高と学校が一緒で、何度か話をしたことがあったが、まさかそう思っていると孝介は考えもしなかった。
「孝介君が最初だったんだよ。私に話しかけてくれたの。私ね、小学校を卒業したと同時に引越しをして、新しい場所に慣れないまま中学に入学したの。それから、あまり人と話さないから勉強ばかりして、そうして視力が落ちて、まるで誰か違う人物を演じているように、私自身を押さえ込んでいた時にね、孝介君が話しかけてくれた……」
「あっ、えっと、あれは確か、勉強のことだったような……」
話しかけたことは覚えていた。塞ぎ込んでいた杏子に話しかけたことが勉強のことだと思い出し、何だかつまらないことをしたと思った。
「でも……嬉しかったんだよ。話しかけられたことも、私が頼られてるんだって思ったときも、すっごく嬉しかった……」

徐々に嗚咽が激しくなり、気付くと腕を組んでいるように、二の腕の辺り彼女の柔らかい感触に触れる。
「じゃあ、どうしてそんな格好をしてまで、なんで……」
経験したことのない状況に、孝介はどうしていいのか分からず、きょろきょろ視線を動かす。
「こうでもしなきゃ、私達の関係が進歩しないと思ったから……こうすればきっと話しかけてくれるだろうと思って、あの時みたいに……」
強く握り締める杏子を見下ろす孝介。今までに会ったどんな子にも抱いたことのない気持ちが、杏子に対して感じていた。
「そんな格好しなくても、俺は初めて出逢った時の杏子が一番だって思う」
優しく温かい孝介の言葉に、空いていた片方の手でメガネの下を伝う涙を拭う。
「あっ、ありがとう……」

二人の様子を眺めていた理佳は、事が上手くいってほくそ笑んでいた。
「へっ、二人ともなかなかやるじゃねぇか……」
二人はうまくいくと確信し、安心した理佳はこっそりとこの場から離れていった。

週の始まりとなり、徐々に学校の生活に慣れ始めた生徒達が学校へと集まってくる。それは、新たな事件をも運んでくる。
「よっ、アツアツのお二人さん」
朝のホームルームが始まる前、理佳が冷やかしにやってくる。
「何だよ矢神。こう仕向けたのは、お前じゃないのか？」
廊下の窓辺で話をしている二人に近づいてきた理佳に勘繰る孝介。昨日のことがあったためか、二人の距離はどことなく縮まっているように見えた。

「あっ、気付かなかったけど、髪を元に戻したんだ」
指差し驚いてみせると、杏子は頬を赤く染めて照れながら孝介を見やる。
「孝介君が（初めて逢った時の杏子が一番だと思う）って言ってくれたから、戻したんです。やっぱり、自然のままが一番ですよね。でも、どちらにしても、学校から戻すようにと言われていましたけどね」
恥ずかしさを吹き飛ばして、杏子は満面の笑みを見せ付けるように理佳に向ける。
「何だ、そんなこと言ってたのか。遠くからじゃ……」
つまらなさそうに、何気なく呟いた言葉に孝介が勘付いた。
「んっ？　遠くからじゃ？　何だって、その先を言えよ」
「えっ、あっ、遠くからって、何のことだろう、分からねぇや、はっ、ははははっ……」
いても立ってもいられず、孝介の追い詰める視線を感じた理佳はごまかそうと必死に作り笑いをする。
「てっ、てめぇ、やっぱ遠くから見ていやがったな！」
「ひえぇ～っ、こえ～っ！」
人目も気にせず、孝介は逃げ出す理佳を追いかける。理佳も面白がって、杏子に言ったセリフを校内中に叫び散らす。その姿を遠くで、杏子はどこか微笑ましく眺めていた。

あれやこれやと時間が流れ、この頃真面目に授業を受けていたため、珍しく昼休みに屋上で寝転んでいた。
秋風が心地よく髪を撫で、お日様は温かい陽射しをいっぱい降り注いでくれる。目の前をトンボが横切り、空にはうろこ雲で埋め尽くされ、夏が終わったのだと告げているようである。
「やっぱり、ここにいたか」
少しだけピリッとしたメガネを掛けた祐樹が、寝転がる理佳を見下ろしていた。

「うわっ！　いっ、いきなり現れんなっての」
もろに視線が合い、理佳は気持ち悪そうに顔を顰めながら身を起こす。
「どうした？　今回は事件なんて起きてないぜ」
起き上がる様子を、祐樹は半歩退いて無愛想に眺めていた。格好といったら、まるで心を映す鏡のようにきっちりときまっている。
「おおまかにはそうなるが、うまいことくっ付けたのはお前じゃないのか？」
「さぁ～て、何のことだか」
屋上を囲っている金網の前に立ち、理佳はとぼけてみせる。
「まぁいいさ。今回の事より、これから始まろうとしていることのほうが重大だ」
いつものメガネを拭く動作をしながら、祐樹は何気に話す。
「何だよ、重大なことって？」
振り返って食い付いた事を確認すると、祐樹のメガネを通して覗く瞳が怪しく光る。
「矢神理佳を、生徒会副会長に推薦するらしい」
「うえぇぇぇっ！」
あまりの突然＋突拍子もない事に、理佳は顎の関節が外れるんじゃないかというぐらいビックリした。
「嘘だぁ～っ！　そんなの、誰が言ったんだよ！」
「生徒会長に立候補をする、２―Ｂの江田敬史と数名の先生方さ」
推薦するのはあるとしても、あたしを指名するなんてどうかしてると理佳は思っていた。
「何だそりゃ？　どうかしてんのかよ、あたしを副会長に推薦すんなんてさ」
見る見るうちに、理佳は怒りを前に押し出すようにして、今にも祐樹に食って掛かりそうなくらい距離が近くなる。
「なっ、何でも、生徒会役員になれば少しは大人しくなるだろうっていう見解だ」

「ハッ！　冗談じゃない。あたしがそんなもんなんかなるわけねぇだろ！」
　まるで祐樹が推薦した人物かのように、理佳は少し怯えた祐樹の胸ぐらを掴む。
「それと、もう一つ言っていた。もし、副会長になりたくなければ、代わりの副会長になるべき人物を探せ、って言ってたが……」
「じゃあ、お前がなれよ」
「生憎だが、僕はそういう器じゃない」
「ケッ！　そうかいそうかい。そんなにあたしに生徒会に入れたいってのか。よっしゃ、そうなりゃ、全力で探してそのなるべき人物を探してやろうじゃないか！」
　意気込みを高々に、理佳は全力を尽くすことを誓った。
　しかし、その裏でうごめく立候補者の江田敬史には、もっと深い理由があるのだと、今の理佳に知る由もないのであった。

続く

トラブルバスター　RETURN　後編（後書き）

このあと生徒会騒動へと話が進みますが、昔の作品のためデータがなく書いたかさえ定かではありません。
そのため、次話は進級して3年生となった理佳の話になります。悪しからず…

トラブルバスター　すぺしゃる　前編（前書き）

季節は巡り、何回目となる春を迎える。
三年生となった理佳。そして、新たな時間が彼女を周囲を巻き込んでいく。
新たに挑むシリアスなトラブルバスター。どうぞ楽しんでください。

トラブルバスター　すぺしゃる　前編

トラブル・バスター　すぺしゃる　前編

あの生徒会副会長の一件から数ヶ月が過ぎ去り、理佳はついに最高学年の三年生となった。

歩き慣れた道のりを闊歩(かっぽ)し、いつものポニーテールを春風になびかせ少女はあくびを一つする。

「ふわぁぁぁぁ、ぽかぽか陽気だこと」

今年は平年にも増して天候に恵まれ、気温も二十度を超えるという温かさに、新学期早々に拝むことのできなかった春の風物詩が咲いていた。

「おっ、咲いてんじゃん、桜」

こんなナリをして、花などに興味がないように思われがちだが、理佳の唯一の趣味といえるのが花だったりする。

「咲くの、早すぎじゃねぇの?!」

あらかた眠気を誘うあくびの消えた彼女は、通学路に隣接している公園に植樹されている桜の木を見上げる。

「よぉ、矢神」

駆けてくる足音と一緒に、彼女の知っている男子生徒の声に呼ばれる。

「んっ、あぁ、山野辺か」

「山野辺かぁ、はないだろ無愛想なヤツだなぁ」

口を尖らせるのもそれぐらいにして、孝介と二人で同じ道を歩き始める。

「そういえばさ、杏子ちゃんはどうしたんだよ、見当たらねぇけど」

「あぁ、アイツか?　何でも、飼育委員長になったらしくて、他の飼育委員が決まるまで動物の世話をするんだと」

「一所懸命だねぇ〜」

委員会など所属したことのない理佳にとって、委員というものに興味などない。
しかし、何かそのような職につくことは決して無駄にはならない。将来、進学にせよ就職にせよ、それぞれの進路を決定する上で役にはたつはずである。
「そうとも、そういうトコが良いんだよ」
誇らしげに胸を張って断言する孝介を、理佳は冷ややかな視線で睨む。
「そんなにカワイイんだったら、一緒に手伝えば良かったのに」
「いっ、いやぁ、それは、おっ、俺、ウサギアレルギーでさぁ、触っただけで蕁麻疹(じんましん)が出るんだよ」
「フ〜ン、じんましんねぇ……」
感慨深げに、睨む視線を戻そうとしない。
「お前、前に言ってたろ。俺は健康体で、病気なんて寄って来ねぇって」
「それは病気に関してだろ？　アレルギーは、いつ発生するか分かんねぇんだよ。触らぬ神に祟りなしって言うだろ？」
「アレルギーだって、病気の一種だろうが。そんなことより、お前がことわざを知ってる自体病気だ」
反対に笑いのネタにされ理佳は高笑いをするが、孝介の方は機嫌が悪い。
「チッ、とにかく、杏子は学校に一足早く行ってる」
胸くそ悪い思いをしてしまった孝介は、理佳の顔も見たくないとでも言いたげに視線を合わせない。
「そうカリカリすんなって。埋め合わせのつもりじゃないけどさ、これやるよ」
手提げカバンをガサゴソいじくり返し、何やら目薬程度の大きさの包みを取り出す。
「何だよ、それ？」
「まっ、開ければ分かるさ」

珍しい好意に、孝介は違和感を覚えながら包みを開けていく。
「おっ！」
目に入っていたものは、彼女にしては趣味のいい小さなヘアピンだった。
「いっ、いいのか？」
「あぁ、煮るなり焼くなり好きにしていいよ」
「食えねぇけど、ありがたくもらっとくぜ」
食えねぇというとこ辺りに向かっ腹が立ちそうだったが、さっきの一件を考慮してやめた。
歩くこと数分、いつもの他愛ない雑談をしているうちに通い慣れた校舎に到着する。
朗らかな風にそよがれて生徒達は登校する。
新入生の対面式も終え、後は気長に学校生活に慣れるのを待つばかりだ。
校門を抜け校舎内に入ろうとしたら、玄関に佇む一人の少女が駆けて来た。
「……孝介くぅん」
いかにも泣き腫らしたような、ひどく怯えてどんな言葉も表現できないといった様子の声をしている。
「どっ、どうしたんだよ、一体？」
「うっ、うさ、ウサギ小屋……」
「ウサギ小屋がどうしたんだ？」
すがる少女に、互いに見合う孝介と理佳。
「はっきり言ってくれよ、どうしたんだ？」
「あのね……朝来たら……ウサギ小屋の金網が破られてて……気づいて小屋を覗いたら……」
瞳に溜まった雫を、少女はそれ以上の言葉を噤んで堰を切ったように零す。
「覗いたら、どうしたんだ？」
「ウサギが……一匹のウサギがグッタリして赤く染まってたの……」

「そっ、それって……」
「嘘だろ……」
最悪の状況を想像して、お互いに合致したように視線を合わせる。
そして、杏子が怯える理由に気付く。
「おい、行ってみようぜ」
校の一大事と考え、理佳は驚きと好奇心の半々の気持ちを抱え現場へ急ぐ。
現場となるウサギ小屋のある中庭は、教室棟と特別棟のある校舎に囲まれた日射時間の少ない場所に位置している。
そうなると、日光の射し込まない朝方は人目に付きにくく、そこは死角となる。
一目散に向かった一同は、一足早く集まった職員や生徒達の人垣に気付く。
「やっぱ、本当か」
後悔に次ぐ突き付けられる真実に理佳は愕然とし、その身を人垣へと向かわせていた。
迷惑がる人達を抜けて先頭に立った時に見た光景、それは陰惨で目を背けたくなるものだった。
ぐったりと横たわるウサギ。
その横を、何も知らず朝食を食べる仲間たち。
同じ囲いという世界の中で生きている仲間を、元からいなかったかのように生活しているウサギ達。それは、忘れ去るように見向きもせず、仲間に見捨てられたかのようである。
「お、おい、あのウサギ死んでるのか？」
「微かだけど、まだ息があるみたいなの」
「じゃあ、何で病院とかに連れて行かないんだよ？」
「あまりにも来るのが早くて、担当の先生がまだだったから……」
勝手に持ち出すのはいけないことだが、一匹のウサギが生死の境を彷徨っている事態だというのに、見てみぬふりをするのは犯罪行為に匹敵する。

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。ウサギがかわいそうじゃないか、早く医者に診てもらわないと」
理佳の発言が周囲を動かし、やっと駆けつけた教師に頼み、杏子は傷ついたウサギを抱えて動物病院に急行した。

「あのウサギ、助かるといいな……」
衝撃の事件から数時間が経過し、気付けばお昼を回っていた。
「状況が状況だけに、ヤバイかもな……」
さすがの孝介も、ガールフレンドが巻き込まれた一件の経過に一抹の不安があった。
飼育委員長の杏子は、その後のウサギの様態が気になって今日は早退扱いで付き添うことになった。
学校に戻らないという連絡が孝介に直接あり、彼女の私物は孝介が届けることになった。
「一体、誰がヤったんだよ！」
悔しさを込め、屋上のフェンスに拳を叩き込む。
「さぁな、朝っぱらだったんだ、誰がいたかなんてわかんねぇよ」
「あれはどう見ても、人間の仕業に決まってる。故意でなきゃ説明ができねぇ」
「そんなの決まってんじゃん。幽霊とかの類にできねぇよ」
「クッソ！　一体だれなんだ？！」
「お困りのようですね」
突如割り込んでくる闖入者。誰であろう、該当する人物は校内に一人しかいない。
「何だ、祐樹か」
「知ってますよ。新聞部部長磯部祐樹に掛かってしまえば、今回の事件の容疑者など手に取るように分かってしまいます」
三年になってレベルアップしたらしく、いつも漂っている雰囲気に拍車がかかってきたようである。
「ほっ、ほんとーか？」

「ええ、僕にかかってしまえばちょろいものですよ」
メガネのブリッジを押し上げ、祐樹は自信満々に答える。
「では、お二人とも新聞部部室へ」
「なんで、あたしもそン中に入ってんだよ！？」
理佳の発言も虚しく、祐樹は二人を情報の発信基地へと案内する。
校内の中であまり陽射しの差し込まない場所、そこにひっそりと新聞部がある。
「ったく、いつもく……」
通い慣れてしまった新聞部の部室に入った瞬間、理佳はどこか違和感を抱いてしまう。
「あっ、部長。どうかしました、昼休みに？」
いつもジメっとしてて、暗い印象を受ける部屋に見慣れない女子生徒がいた。
「桐場君こそ、頼みもしていないのに掃除など」
「いえ、部員として当然のことをしたまでです」
開けられることのなかった窓を思いっきり開け、少女は一人清掃をしていた。
「誰だよ、この一年？」
「紹介しておく。存亡の危機に瀕している僕の部に入ってくれた、一年の桐場未彩君だ」
部長から大仰の紹介をされ、新入部員の少女は清掃の手を休めて頭を下げる。
「あなたがトラブル・バスター矢神理佳さんですね？　それから……」
「マブダチの、山野辺孝介だ。よろしく」
お互いに名乗りあったところで、祐樹は比較的清掃が終わっている奥辺りに座る。
「で、今回の、ウサギ殺傷事件の容疑者ですが、見当のつく限り四人います」
「ちょっと待った。なんで、そんな根拠があんだよ？　杏子が来た

のは朝早くなんだぜ」
「フフフ、自慢ではありませんが、たまたま今朝早く学校にいたもので、しっかりと目撃していました」
自慢でないと言っときながら、端々に自慢を織り交ぜている。
「すげぇなぁ、容疑者が分かるなんてよぉ」
自分に分からない容疑者のことを知り、孝介は露骨に驚いて見せる。
「大げさなヤツだなぁ。そんなに驚かなくてもいいんじゃねぇの？」
「どうしてさ？」
「祐樹はな、自慢して褒められっと調子に乗っちまうんだ。まともにやり合おうなんて思わない方がいいぜ」
「酷い言い方ですね。容疑者の名前を提供しようと思ったのに、教える気が失せてしまいますねぇ」
三人のやり取りを耳にして、清掃を終わらせた未彩がクスッと笑う。
「何か面白いことでもありましたか、桐場君？」
「いえ、部長がこんなフランクに話しているなんて、想像できなかったものですから」
「そりゃぁ、言えてる」
理佳も賛同するが、当の本人は気に食わないらしく嫌な顔をする。
「オホン、早速ですが、容疑者の名を挙げましょう。二年四組・玉城榛名。三年五組・上松恭平。三年二組・文郷浅海。そして、三年七組・田之上美姫の四名です」
「すっげぇ、名前まで分かるなんて信じらんねぇ！」
孝介はただただ関心するばかりだった。
「そこが、部長のすごいところですよね」
未彩も持ち上げるのが上手い。
「で、犯罪現場不在証明（アリバイ）はどんな感じだ？」
「そこですが、どうも朝早く来る理由にしては、どれも不純過ぎて……」

「どういう意味だ？」
「四名とも、それぞれ理由があるみたいなんですが、どれもこれも曖昧なんです」
「いつ事情を聞き出したんだ？」
「名前が挙がってからすぐです。私は女子から、部長の方は男子から聞きました。同性同士なら話しやすいですから」
コイツ、なかなかやるな、と思う理佳。
「一年なのに、よくできるな」
「中学時代、放送部の関係でアナウンサーっぽいことをしていたものですから」
「すっげぇ」
それしか言えないのかと、突っ込みを入れたくなる理佳。
「どうすンだ山野辺。犯人探しすっか？」
心を入れ替え、真摯的な眼差しで孝介を見やる。
「お前は、どう考えてるんだ？」
「今回ばかりは好奇心だけで掛かるのは、ちょっとヤバイ気がすンだよ。人間じゃないけど、生き物傷つけるヤツと向き合うことが、できないんじゃないかってな」
珍しい反応に、孝介と祐樹は度肝を抜かれてしまう。
「そうだな。たかがウサギだが世間に知り渡れば、立派な犯罪として取り糺される。一般の、それも高校生が首を突っ込める領域を遙かに超えている」
さすがの理佳が牽制している姿に、祐樹も考えてしまう。
「やはり、探偵まがいな行為をするのは、マズイですよね……」
「やろう……」
一人の呟きがもれる。
「罪もないのに傷つけられたウサギや、見守っている杏子が可哀想じゃないか。それをほっといて、いいと思うのか？」
諦めとも、怒りとも表現しにくい複雑な心境で孝介は訴えた。非力なものが浮かばれないと。

「それは……」
「今見過ごしたら、犯罪を認めることになるんだぞ。それでもいいのかよ？」
ここに集まった者達は何もしてはいない。だが、孝介の話をぶつけている相手は、確実に犯人への批判だった。
「だが、これ以上、僕らは何もできないんだ。矢神が言う様に、生き物を傷つけた代償は法律で罰せられます」
「だから、そいつに分からせてやンだ。自分のしたことをな」
「彼女のためにか？」
「違う！　みんな、一人一人のためにだ」
決心は固まった。
例え、誰かが妨害しようとも、それを乗り越えて見せると。
「分かったぜ山野辺。お前のために一肌脱ごうじゃないか。一緒に見つけ出してやる」
椅子から立ち上がり宣言する理佳。
「新聞部の名誉にかけて、僕も協力しましょう」
「力になれることでしたら」
未彩も一年としては心強いことを言ってくれる。
団結し、一つのことを目標に掲げ、このメンバーは動き出す。
「では、放課後から開始しましょう。それぞれ、嫌がるかとは思いますが、根気強く粘ってアリバイを崩しましょう」
祐樹がまとめた直後、待ってましたとばかり昼休みの終了を告げるチャイムが鳴る。

一人ずつ当たる計算で、放課後を狙って四人は動いた。更なる犯行を防ぐため。
最終的な情報を得るため、集合場所を新聞部の部室と定めてそれぞれ話を聞いてきた。
「で、どんな感じだった？」
「玉城さんに会いましたけど、彼女は、吹奏楽部で今日が鍵当番だ

ったと言ってました」
ちょっと古めかしい鉛筆の後ろを使い、頭を掻きながらメモを見下ろす。
「僕は、文郷浅海に話を聞きましたが、しつこいと言われ、拒否されました」
放課後になってやっと射し込んでくる陽射しを浴びて、祐樹のメガネが反射する。
「俺は、たまたま同じクラスの田之上に聞いたが、ぱっとしなかったなぁ」
「どうしてさ？」
不思議そうに理佳は尋ねる。
「はぁ～彼氏を待ってたんだとさ」
「だから、言葉を濁してたんですね？」
集められる情報を、未彩は一言一句聞き漏らさずメモっている。
「あたしは上松に聞いたけどさ、予習を欠かさずにしたくて早めに来たんだとさ。こんなに勉強が好きなヤツ、誰かさんにそっくりだぜ」
しかめっ面をして祐樹を見る。
「そうなると、この中で一番怪しいのは文郷さんということになりますね？」
誰もが妥当と思った矢先、それを否定した人物が一人いた。
「いや、そいつじゃない」
否定したとたん、一斉に視線が集中する。
「じゃあ、一体誰だよ？」
「田之上美姫さ」
きょとんとした顔で、三人は顔を見合わせる。
「なぜ、そうと断定できるんだ？　彼氏を待つことぐらい、当たり前のことじゃないのか？」
「断定か……そんな複雑じゃなくて、単なる勘さ」
得意満面に理佳は強かにニヤついた。

「なるほど、トラブルバスターの原動力は、直感なんですね。勉強になります」
嘘か本当か定かでない事柄なのに、一年の未彩は真剣に受け取ったようだ。
「一々、真剣に捉えなくてもいいんですよ、桐場君」
「はぁい……」
先輩に戒められ、未彩はシュンとする。
「さて、絞り込めたことだし、本格的に動くのは明日にすっか、なっ？」
さっきまでとは打って変わり、理佳の表情はいつもの明るさが戻っていた。
「ったく、こんなノリでやってきたなんて、信じらンねぇぜ」

前半　終わり

トラブルバスター　すぺしゃる　後編（前書き）

早朝の学校で、飼育されているウサギの殺傷事件が発生した。証拠はないものの、いつもながら新聞部の活躍により容疑者が浮上する。トラブルバスターが目を付けたのは、理由として一番シンプルだった田之上美姫だった。

トラブルバスター　すぺしゃる　後編

トラブルバスター　すぺしゃる　後編

翌日、学校に揃った五人は、昨日のウサギの様態を心配して早退した杏子に会うことができた。
昨日同様、飼育委員の仕事をこなしていた杏子だったが、昨日の惨事があっただけに落ち込みはかなりあった。
「おはよう、孝介君……」
「おっ、おう……」
「……元気ねぇなぁ～」
心を入れ替えた理佳は、この頃嫌だった学校にも遅刻することなく登校していた。しかし、事件を追っている最中は関係ないようである。
「矢神の方が元気ありすぎなんだよ」
すかさずツッ込み入れる祐樹。
「あのウサギ、どうなんだ？」
「うん……様態は安定したみたいだけど、まだ意識が戻らないんだって……」
「そっ、そんなに気を落とさないで下さい。きっと、きっと良くなりますよ」
不安でたまらない様子が滲み出る杏子に、未彩は優しい気遣いの言葉をかける。
「桐場君の言うとおり。心配ばかりしていては、気を病んでしまいます」
「……うん、そうだね」
皆で励まし、その後飼育委員のお手伝いをした。仕事をした後、犯人探しの状況を話した。
「そうなの……矢神さんが目星をつけたの、田之上さんなの」

「えっ、何か心当たりがあるのか？」
孝介の問いに、杏子は首を振った。
「そうでもないけど、ただ前に同じクラスだったことがあるから」
「面識があるのなら、何か不審に思うことはないですか？　授業をサボったり、教師と折り合いが悪かったりとか」
メモを片手に未彩は尋ねた。
「多分それはないと思う。けど、よく授業が終わるたびに男子生徒がよく来ているのは覚えがあった」
未彩は一人「なるほど」と唸りつつ、メモっている。
「やっぱ、言ってることはホントなのかもな」
「おっ、何か今回はやけに自信がなさげじゃん？」
いつもはビシッと言い当てる理佳だが、今回ばかりはどこかしおらしくて孝介は疑問を感じていた。
「たまにはあたしだって当たらないこともあるさ。宝くじよりは正確だけどよ、勘が冴えない時だってあるさ」
「いつもの矢神らしくない発言だな。これは、大雨になって洪水まで発生するんじゃないか？」
多少の雲で覆われているが、快晴に近い天候の空を見上げ祐樹はからかい加減で口にする。
「そんな言い方ないだろ！　あたしだって見当はずれの時だってあるさ。いつも勘が冴えてたら気味悪いだろ？」
「その勘がこれまで冴えてたから、事件を解決してきたんだろ？」
理佳に衝撃を走らせる祐樹の言葉。
これまで、あって当然の直感があったからこそいろんなことに首を突っ込み、いろんな人から話を聞いては結果を出してきた。自分にとって空気のようにあって当然の長所が衰えてきてしまうと、人は弱くなる。心の持ちようで解決するだろうが、失っていく反動は想像以上に大きく、ダメージを和らげるにはきっかけが必要になる。
「そうだったな。それがあったからこれまでやってきたし、そんなことでしみったれてても何も始まらないな」

何かを悟ったかのように、理佳は表情を崩し穏やかな笑顔を浮かべる。
「あたしの勘は最強だってことを、確信するためにいっちょ鎌かけてみっか」
「やっぱ、立ち直りが早いぜ、矢神」
からかっていると感じたが、これ以上何を言っても始まらないと思って逆襲することは抑えた。

理佳が勘で決めた容疑者にいよいよ対面する時が来た。どこで何をしているのかという行動範囲を祐樹が前もって調べ上げ、理佳に伝えていた。
いつも休み時間にいつのは教室で、杏子がいては話しづらいと考え立ち合わせないようにした。
「田之上美姫さん、だよね？」
「ええそうだけど、あなたは？」
「校内で有名人の、矢神理佳さんさ」
休み時間、半数の生徒が遊びに出た教室はけっこう静かで、空席も目立っている。
彼女の座っている前が空席で、理佳はそこに座ることにした。
「そう、あなたがトラブルバスター矢神理佳なの。想像してたのと違うわね」
「どんな風に？」
第一印象が聞きたくなって、理佳は椅子を逆に座って聞く。
「もっと、賢そうな人だと思ってた。でも、トラブルバスターって呼ばれてるのが分かる気がする」
「あんた、真顔でよく平気に言えるねぇ」
自分でも賢いとは思ってないものの、こうも他人から直接見下すような事を言われるのはいいものではない。
「だって、わたし人を見る目が良いんですもの」
「すごい自信あるね、その発言」

表情は至極明るさを保っているが、内奥では血管がブチ切れそうなほどムカついていた。
「で、矢神さんが来た目的は何かしら？」
「あんたも知ってるだろ田之上さん。昨日飼育しているウサギが鋭利な刃物で切りつけられて、病院に送られたこと」
真摯的な眼差しで、理佳は彼女の微妙な変化を逃すまいと探していた。
「ええ、知ってるわ。早朝襲われたんでしょ？　可哀想よね、何の罪もないのに」
「そうだよな。悪いことなんて何もしてないのに襲われるなんて、心の狭い人間がすることだよな」
「そうね」
短く答えると、美姫は理佳を置いて席を立つ。
「おい、どこにいくんだよ？」
「どこへ行くにもあなたの許可が必要なの？　どこへ行こうが、わたしの勝手でしょ？」
「それはそうだけど、いきなり立つからさ」
「トイレよ。まさか付いて来るとか言わないわよね？」
まるで嫌うかのように理由を言って外す彼女に、返す言葉が浮かばずこの場は見送ることにした。

その日の放課後、休み時間の一件を部室に集まったみんなに話した。
「あれ？　誰かいないような……」
掃除が行き届いた部室に揃った面子を見渡し、理佳は違和感を覚えた。
「ああ、桐場君が委員会の集まりがあるとかで、今はいない」
「ふ～ん、入学したばっかなのに大変だなぁ」
一人欠けてはいるがだいたい揃ったところで、理佳は話すことにした。

「で、田之上に今日会ってきたけどよ、何か隠してるなありゃあ」
「どうして分かんだよ。たかが二言三言しか交わしてないんだろ？」
どかっと椅子に座り込む孝介。
「そうだけどさ、ぜってぇ何か隠してるぜ」
「とにかく、矢神がここまで言うからには何かある。桐場君が戻ってきたら、田之上美姫の知り合いに当たってみましょう」
祐樹はというと、またしても情報ネットワークを駆使して田之上美姫の友人リストを作っていた。
「まったく、抜け目ねぇヤツ。コイツに彼女ができて浮気の一つでもすりゃあ、すぐ暴いちまうな」
祐樹が作ったリストの写しを見ながら、孝介はしみじみ思った。
「全て君の彼女のためを思ってしていることです。人を、ストーカー扱いしないでもらいたいですね」
いつものメガネを上げる癖をしつつ、自分の作ったリストを見る。
「結構少ないなぁ。女子よりも、男子の方が多いぜ」
「おっ、俺の顔馴染みが多いなぁ。こりゃぁ、簡単に聞けっかも」
身近な仲間が関係者だと知り、孝介はある意味すごいと思っていた。
「まだ学校に残ってるか分かんねぇけどよ、何人か聞いてみっから桐場が来たら言っといてくれ」
「おう、頑張ってきな」
孝介を見送り、理佳と祐樹は未彩が戻ってくるのを待った。

次の日、犯人探しのメドが立った理佳達は、一日掛けて田之上美姫の友人という友人に聞いて回り、決定的な証言を探っていた。
「ねぇ、美姫。アンタのこと聞いて回ってるヤツがいるみたいよ」
「それが？　フッ、大したことないわ。気にしなきゃいいのよ、どうせ何も分かんないんだから」
「でもさぁ、あなたと関わった男子にも聞いてるみたいだけど、大丈夫なの？」

「そんなの気にもならないわ。だって、事件の動機なんて、他の男子には知り得ないことだから」

各自、聞き込みに回った四人が集まり、人がほとんどいなくなった校舎の部室にて結果を報告し合う。

「なるほど、田之上美姫さんの交友関係で男子が多いのは、付き合っていた男子ばかりだったんですね？」

みんなの聞き出した情報を書き出し、未彩はまとめの言葉を述べる。

「最長でも一ヶ月、最短で三週間で乗り換えるんだ。かなりの面食いだなぁ、こりゃあ」

「杏子とはもう長い付き合いになっけど、ぜってぇ別れねぇぞ、ぜってぇ！」

「熱い男だねぇ～。こんな場所で堂々と言うなって」

凄みを効かせ、断固別れないと宣言する孝介を、理佳は軽くあしらう。

「その、別れる原因ってなんでしょう？」

「聞いて回ったけどよ、田之上が結構威張り腐ったヤツでさ、付き合ってるのは、あたしのおかげっぽいこと言うから、愛想つかして別れるんだとさ」

「問題はそこみたいですね」

四人を代表して未彩が口火を切った。

「田之上さんにしてみたら、男子は自分に従うのが当たり前、私が好きと言えばどんなことでもしてくれる。と思ったけど、誰も従ってくれない。自分には自信があるのに、すぐ逃げてしまう。悪く言うと自分の奴隷みたいにしたかったけど、なかなかできない。そうしたストレスが堪って、自分よりも劣るもの、そう、例えば、ウサギみたいな小動物に当たったと考えられます」

本物の探偵みたいに、推理を述べるなど未彩もなかなかの逸材だと祐樹は思った。

「う〜っ、悔しいけど、あたしの考えもそうなんだよなぁ……」
「すっげぇ、天下の矢神理佳に追いついたぜ」
心底驚く孝介。
「いっ、いえ、メチャクチャですよ。私なんかに探偵みたいなマネできません」
あえて謙虚に、未彩は物腰低い姿勢をする。
「半分くらいは、その意見に賛成なんだけど……」
「どういうことだ、矢神？」
「そんなに、悪女には思えないんだよなぁ……」

いよいよ、決着の時がやってきた。
場所は、校舎屋上。
容疑者、田之上美姫。
被害を受けた、ウサギの飼育をしている飼育委員長の仲西杏子。
そして、理佳を含めこの事件を解決しようと立ち上がった四人がこの場に集結した。
「どうしてこんな場所に呼び出したのかしら？」
「それはな、あんたと杏子で話し合って欲しいんだ。この事件の解決策を」
結果の見えていた理佳は、もう本人から言ってほしくて直接話し合いを設けたのだった。
「あなたたち、ウサギがナイフで切り付けられたことを言いたいらしいけど、わたしは無関係よ」
まだしらを切り通そうとするが、理佳はこの瞬間を逃さなかった。
「とうとうボロを出したな。あたしは鋭利な刃物で切られたとしか言ってないんだぜ。どうして、無関係な人間が切った道具を知ってるんだ？」
追求を逃さずすると、美姫はなぜか微笑を浮かべる。
「フフッ、まだまだ甘いわ。誰がやったって言ったの？　ウサギを切り付けたのはわたしじゃないわ」

「まだしらばっくれる気か！　お前、どんなことをしたか分かってるのか！」
凄みを効かせ、孝介は強気に責め立てる。
「だから、わたしはしてないわ。やったのは、あの人」
美姫が指し示した場所を追ってみると、出口付近に無言で佇む男子生徒がいた。
「あの人は、確か……」
「そう、今のわたしのマイ・ダーリン」
男子生徒こそ、あの事件当日、待っていたという人物だった。
「どうして、やったんだ！」
「話してあげましょうか？　事件の詳細を」
美姫は話を始める。それは、人を使うという姑息で卑劣な出来事だった。
借金を抱えていた男子生徒は、当日呼び出され金をあげる代わりに、ウサギを傷つけるように命令し、早朝の中庭でウサギを捕まえ切り付けたのだった。
「なんてことしたの……」
あまりの卑劣な内容に、絶句し泣き崩れてしまう杏子を抱きとめる孝介。
「おめぇ！　分かってるのか、しちまったことを！　人を使って動物を痛ぶることが！」
「楽しいことじゃない、お金で人をこき使うなんて。わたしは、彼を救ってあげたのよ。その見返りがあったっていいじゃない」
あまりの酷さに、聞いているだけの祐樹と未彩は唖然とする他なかった。
「おい！　お前は、心が痛まないのか！　お前のしたことはな、立派な犯罪なんだぜ！」
理佳の鬼のような追及に、実行犯の男子は恐怖に慄き身を崩して土下座をする。
「ごっ、ごめんなさいっっ！　おっ、お金がどうしても欲しかった

んだ。ああすれば、お金をやるからって言われたから……」
やるほうもやるほうだが、金を出して人にやらせるというのは、人として最低最悪なことだ。
「そんな弱い男だと思わなかったわ。あなたも腰抜けね。もっとましな彼氏見つけないとな」
人を蔑む態度に、一人の少女が動いた。
「最低よ！　あなた……」
泣き崩れていたはずの杏子が歩み寄り、あろうことか、暴力など決して考えられない彼女が、美姫の頬を叩いたのである。
「杏子……」
誰も彼女の行動を咎めることはなかった。いや、できなかった。

今回の一件で、田之上美姫と彼氏であった男子は即退学処分となり、事件の詳細は警察にも知らされ、二人に刑罰が科せられるのも時間の問題となった。

あの事件から一ヶ月が経過した。
ほとんどの生徒はその記憶に蓋をし、蘇らないことを願うようにテスト勉強に集中していた。
「こんな所にいたんですか、矢神さん」
あの衝撃的な出来事があった場所にて、ずっと変わらず空を見上げてごろ寝をしている少女の元へ、しっかり者の一年生がやってきた。
「今度は一年をよこすなんて、威張り腐ってきたなぁアイツ」
「それって、磯部先輩ですか？」
寝転んでいる理佳に、影を作るようにしてしゃがみ込む未彩。
「えっ、違うのか？」
「はい、自分の意思で来ました」
ふと、思いがけず起き上がる理佳。
「どうしてまた？」

「皆さん忘れかけてますが、この場所であったんですよね？」
「あっ、あぁ、田之上のことか……。あそこまで、ヒドイとはあたしでも思わなかったよ」
被害を受けたウサギは何とか一命を取りとめ、今も変わらずウサギ小屋で走り回っている。
杏子もあまりのショックに立ち直れなかったが、ウサギが元気になったことで持ち直し孝介と仲良くしている。
誰もが忘れようとしているが、決して過去だけは変えることはできない。
「世の中って、事件が起きても平穏な時を刻みますよね。どんなことがあっても」
初夏を告げる微風が屋上を渡り、若葉の香を鼻に残していく。
「それって、思い出したくないように思ってるからなんでしょうか？」
寂しげに視線を落とす未彩。
「それは違うと思うぜ」
悲しさをまとった少女の背後に回り、理佳は背中を軽く叩く。
「みんな、その人達の分まで生きようとしてるのさ。全部ひっくるめて、その人がいると思ってさ」

終わり

トラブルバスター　ふぁいなる前編（前書き）

あと数日と迫った卒業という名の通過点。その日が近づいていることを意識してしまう理佳。そんな彼女が首を突っ込む最後の事件。それは彼女でさえ想像を絶する結末が待っているのだった。

トラブルバスター　ふぁいなる前編

トラブルバスターふぁいなる　前編

嗚呼過ぎ去りし日々。そして波乱万丈な生活に慣れ親しんていたあの頃。時間よ、止まることができるなら、時を刻む針を止めてくれ。そして、いろんなことがあった思い出を永遠に消さないでくれ……

高校最後の年が開け、季節は小雪の舞う一月になった。小雪よりも、降ったり止んだりが繰り返し、吹雪のようになる日も少なくない。

気付いた時には、古臭い灯油ストーブのある薄暗いあの場所にいた。ちろちろ揺れる暖色の炎を見据え、理佳は魂が抜け出てしまったようにぼぉっとしている。

「これで、僕も思い残すことはありません。心細くなるでしょう、辛くなるでしょう。桐場君。僕は、君を信じています。これからも、新聞部の活動を意欲的にこなしてください」

無表情に映る生真面目なメガネの奥の瞳が、今日はやけに感傷的に見える。

「はい。磯部先輩が卒業しても、私が新聞部を守っていきます。三年間、ご苦労様でした」

部を引き継いだ一年の桐場未彩も、今にも零れそうな涙をこらえている。三年が引退し新聞部を引き継ぐのは、唯一の部員であり一年生である未彩だ。一年にも関わらず、精力的に参加して部の運営を助けた。

「そうですか。そう言ってくれるなら、僕も安心して卒業できます」

「先輩……」

「桐場君……」

がっちりと握手を交わす二人。互いに頬を染め、何かを恥らっているように目線を合わせない。このまま事態が進めば、熱い抱擁もアリ？　って展開になりそうだが、二人以外にもう一人この場にいることを忘れてはならない。
「こんな寒いってのに、お熱いねぇ……」
ストーブに手をかざしながら、ため息のような水を差す一言を呟く理佳。その言葉に新聞部の先輩・後輩はハッと我に返り繋いでいた手を離す。気まずさを感じた祐樹は、咳払いとクセを同時にする。
「どっ、どうかしたのか、いつもの矢神らしくないな」
「そうか……気のせいだろ？」
「そうですよ。体の具合でも悪いんじゃないですか。早く帰った方がいいんじゃありませんか？」
いつもの様子とはがらりと違い、知り尽くされている二人に気遣われる。
「別に何ともねぇよ。ただ、ぼぉっとしてたら、考えちまうんだ。今年で、あたし達は卒業なんだって」
そう、あと数日間で理佳達三年は卒業を迎える。いろいろあった日々を思い起こし、破天荒な理佳でさえ物思いにふけっている。
「そんなことで考え込むな。僕だって、誰だって卒業するんだ。矢神らしくないことをするな。明日、大雪が降るじゃないか」
元気づけてるのかけなしてるのか、区別のつかないことを祐樹は平然と口にする。
「何だよ、考え込んじゃいけないってのかよ。それに、大雪はヒドイだろ」
いつもの元気が戻ったように言い返してくる理佳。祐樹はこうなると計算した上で口にしたようだ。
「あっ、元気を取り戻したみたいですよ、矢神さん」
「……ハメられたか」
まんまと祐樹の手中にはまり、苦笑いの理佳。物思いにふけっても、根本的には何も変わらない。そんな姿にふと安心感を覚える。

人のまばらな校内は結構冷える。ほとんどの生徒はさっさと家路に着き、残っている生徒もいつものごとくストーブの余熱に当たりながら雑談をしている。放課となった教室は、原則的にストーブを消火することになっている。管理する担任教師が消すもので、生徒に任せっきりではちゃんと管理しているのか分からないためだ。

残してきた荷物を取りに戻った理佳は、新聞部の部室に戻る最中、口論をしている生徒と出くわす。

「もう、意気地がないんだから。それでも男なの？」

「男か女かの問題じゃないと思うんだけど……」

「一々、細々と言わないの。ったく、あれごときで怖気づくなんて」

一年生の二人は、女子の方が勢いに任せ強く言い放ち、片割れの男子はひょろひょろとして頼りなさそうに見える。

「だってさぁ、緊張するに決まってるよぉ。１６年間しか生きてないのに、告白するなんて。第一、女の子とも話したこともないんだよ」

「ちょっと待って。あなたが話してる相手の性別は？」

「えっ、女子でしょ？　でもさ、これとあれとは違うよ……」

「何？　まさか、あたしを女として見ていなかったわけ？」

「そっ、そんなことないよ。だって、小学校からずっと一緒だったから、何かさ、慣れちゃって」

「あぁ～もう、どっちなの、はっきりしなさいよね！」

さっきから進展のない会話。どうやら、男子が誰かにコクろうとしているようだ。でも、男の方が勇気を出すことができず言えずにいる。

状況をそう判断した理佳は、即実行に移る。

「お～。お困りのようだなキミ達。このおネーさんに任せれば、すぐに解決してやっぜ」

見知らぬ先輩に声を掛けられ困惑する二人。どんな言葉を口にしてくるだろうと待ち構える。

「あっ、あの～誰ですか？」

さも当然のごとく、自分の事を知っているだろうと思っていた理佳。だが、当たり前な返答があるだろうと思っていただけに、衝撃の大きさははかり知れなかった。
「うっ……しっ、知らないのね……」
だが、理佳の場合、落ち込んでなどいられない。
「しか～し、そんな問題を解決するのがあたしの役目。窺うところ、何やら押し問答してるんじゃねぇの？」
「そうなんですよ。コイツ、小心者でホント救い難いんです」
やっと調子に乗ってきた雰囲気を受け、詳しい話を二人から聞きだす。
まだ初々しさが漂う一年生の二人は、女子は皆本梨花といい、困ったちゃんは氷護影という。口論の原因は、影が思っている女子に告白するつもりなのだが、極度に恥ずかしがって進展がない。そこで梨花が急かすものの、何の効果になっていないことらしい。告白するといっても、一般的な告白ではないことは確かだ。
「影君が女に告白できないからモメてんだろ？　だったら、ズバッと直球勝負に出ろよ。どう思われるか分かんねぇけど、このままでいたらモヤモヤが残って気分が悪いだろ？」
「先輩の言う通り、さっさと言えばいいんだよ。ずっとくすぶり続けるのだって辛いでしょ。言っちゃう辛さより、我慢する方が辛いと思わない？」
二人の受けたくもないプレッシャーを浴びせ掛けられ、影の表情がさらに曇りだす。
「口ではそうは言えるけど、実行するとなるとそうはいかないんだよ……」
この期に及んでも弱気な姿の影。誰かが躊躇ってると、その周囲の人々も影響を受けてしまう。
「まだ言うか。もういいよ。影が言えないなら、言えるまで絶交だからね。そこまで臆病だなんて思わなかった」
究極の切り札を叩きつけられ、影の逃げ道は寸断されてしまった。

これまで、何か困った事があった時にはすぐ梨花に相談してきた。そんな心の支えである彼女との縁が切れてしまうとなると、頼る存在を失ってしまう。
「そんなぁ……僕は、梨花の力がなきゃだめなんだよ。考え直してよ」
「甘えないで！　高校生なんでしょ？　もうそろそろ自分の力で何とかしてみたら」
冷たく言い放つ梨花。そのやりとりを間近で見る理佳は、入る余地がないことに気付き黙りこくっていた。
「……分かったよ。何とかしてみるよ」
「よろしいっ」
ケリがついたとたん、梨花は満足気に教室棟へと行ってしまう。一人残った影は、一段と名前通り影が濃くなってしまうように落ち込んでいる。
「そう落ち込むなよ。アイツはお前のためを思ってしたんだ。お前が、一人前になれるようにな」
肩を抱き慰めの言葉を掛けるが、魂が抜けたような影には聞こえてないようだった。
「他人事だと思っていいよなぁ。告白なんてしないからさ。告白する身にもなってよ……」
「そういえばさ、肝心の告白相手って誰だよ？　彼女か？　それとも、アイツだったりして……」
「先生です。理科の高月先生」
「せ、せ、センセー！　マジかよ？」
告白する相手が同世代の高校生ではなく、勤務している教師に告白するなど、なかなか肝の据わった男ではないか。
「はい。だから嫌なんです。分かってもらえます？」
「よ～く分かった。んじゃ、そうと決まれば行動あるのみ。早速、作戦会議だ。行こう」
「行くって、一体どこへです？」

おずおずとしている影の手を引っ張り、理佳は連れて行こうとする。
「この学校の、情報発信基地さ」
得意気に微笑む理佳。だが、これがトラブルバスターとして最後の首を突っ込むこととは自分自身知るよしもなかった。

前半　終わり

トラブルバスター　ふぁいなる後編（前書き）

放課後の校内で見かけた一年生の二人。その一人の氷護影は、ある人に告白するとのこと。その相手というのは、なんと教師！
妄想爆発！　高校生活の集大成がここに。

トラブルバスター　ふぁいなる後編

トラブルバスター　ふぁいなる　後編

哀れな子羊のように、影はさっき会ったばかりの矢神理佳に連れられ情報発信基地、新聞部部室を訪れる。
「さっ、遠慮なく入りな。まっ、あたしが言うことじゃないけどな」
促された影は、そのどんよりとした空気を感じ警戒心を一瞬にして漲らせる。
「ここに、入るんですか？」
「やっぱ、入りづらさを感じるよなぁ。あたしも最初来た時、地獄に通じてるんじゃないかって思ったぜ。でも心配すんなって、すぐ気に入るさ」
理佳の言葉を半信半疑で受け止めながら、何とか状況を打開しようと思う心に突き動かされ、開かずの扉みたいな恐怖感を胸にドアを開ける。
「あっ……」
「どうした……って、おいっ！」
部室に入ったとたん広がる光景。それは机という机に膨大な数の書類が置かれていた。
「なっ、何だよ、すげぇ数の紙！」
「あっ、矢神さん来たんですね」
「どうしたんだ、その一年は？」
二人とも両手には紙の束を大量に抱え、部室内を歩き回っていた。
「うん？　さっき拾って来たんだ。それより、どこからこの紙が出てきたんだよ？」
「すごいですよ、矢神さん。この膨大な量の紙は全部、この校全ての人間を調べた調査書類なんです。ここにいる私達の資料もここにあるんです」

「だから、一体、どこから出てきたって言うんだ？」
「説明するとだ、この書類は、マル秘保管所にあるものだ。僕が卒業すると、管理する人間がいなくなるから、こうして全部出して桐場君に説明しようとしていたんだ」
　重たそうに書類を下ろし、祐樹はいつものクセを行う。よくもまぁ、こんなに出してきたものだ。
「何だよ、マル秘保管所って。まったく、卒業が近いってのに、まだ校内に知らない場所があるなんてな」
　半ば呆れた様子でため息を交えて呟く。
「で、その一年は誰なんだ？　年下を捕まえて、食う気じゃないだろうな」
　ずっと黙っていた影は、祐樹の一言に一抹の恐怖を感じ始める。
「捕まえて食うだ！？　あたしはヤマンバかっての」
「連れてきた目的って何ですか？」
　やっとそれかけた道が修正されたようで、本題に入る。
「このもやしっ子がな、先生にコクるんだってさ。それで、情報を求めるなら、ここしかねぇと思って連れてきたんだよ」
「なるほど、教師か。それはそれは大胆不敵なことだ」
　大して驚いた様子もなく、祐樹は理佳と影を部室に招き入れる。
「それで、告白する先生って誰なんですか？」
「……高月先生です」
　依頼者？　の影を一人ポツンと座らせ、残りの三人は面接官のように横一列に並んで座る。
「高月先生って、理科担当の先生ですよね？」
「そう、です……」
「その先生なら、わたしも受け持ってもらってます」
　未彩にはその教師の見当がつくようで、何度も頷いて共感する。
「どんなセンセーなんだ？」
「えっとですね、身長はわたしくらいで、髪はちょっと色が抜けてて、毎日イヤリングを替えて来る。そんな人です」

「そんな人ですって、髪と身長ぐらいしか分かんねぇじゃねぇか。もっと、こう、性格的なことは分かんねぇのか？」
「性格は……明るいですよ、多分」
「多分か……適当すぎて、コメントできねぇよ」
あまりにアバウトなイメージ像に、力を入れるはずの理佳は考えに苦しむ。
「あ～もぅ、いいや。お前、その先生に告白するんだろ？　だったら、腰を据えて、当たって砕けろ精神で行って来い。良くても、ダメでも、お前のしたことには文句はない。それどころか、文句を言ったヤツがいたら、あたしがぶっとばしてやるから」
力こぶしを作り、励ましのエールを送る理佳。それが効いたかどうか分からないが、影は何かを決心する。
「う～ん、破れかぶれで行ってみます。どうなるか分からないですけど」
「よ～し、その粋だ。ふっ、今回はあたしの出る幕じゃないみたいだな。まっ、頑張ってこい」
戸口の所で一つお礼の会釈をして、男影は教務室へ向かった。
「何か、一瞬で変わっちまったみたいだな」
「でも教師に告白するのって、並みの勇気じゃ通用しないと思います。先生と教え子の恋。まさに、禁断の果実ですね」
理佳と未彩は、影の願いが成就することを望んでいるが、現部長の祐樹は一人不敵な笑みを浮かべている。
「二人とも、彼のコクハクの本質を分かってないみたいだな？」

祐樹の言いたいことは何なのか？　告白の本質とは？
「さてと、管理方法を教えたことですし、片付けしてしまいましょう」
待つ時間を利用し、祐樹は引き継いだ未彩に資料の管理方法を教え、諸々のやるべきことを済ませていた。
「出したってのに、また片付けるのか。ご苦労なこった」

その様子を、理佳はただストーブに当たりながらしみじみ感じていた。二人でやっているが、一学期から未彩が一人でやるとなると、かなり骨の折れる作業になる。
「みっ、みなさん！」
その時、告白という重大な偉業を成し遂げたであろう影が、明るい表情で戻ってきた。
「どっ、どうだったんだ？」
「うまくいきました？」
「大丈夫でした。どうにかなるそうです」
想像した言葉とはどこか違う返答。
「えっ、どうにかなる？　何がどうなるんだ？」
不思議に思う理佳と未彩。
「だから言ったはずだ。本質の違う告白だって」
「だから何だよ、遠回しに言わねぇではっきり言えよ」
「告白っていうのは、理佳達が想像している『恋』ではなく、何かを、例えば成績とか」
祐樹が指摘したとおり、散々緊張し嫌がっていた告白とはひどく単純なことだったようだ。
「そうです。すごい、ほとんど会話していないのに分かるなんて」
「ふっ、簡単なことだ、君の資料は読んだ。君は物事を大げさに言うクセがある。その上、成績はあまりよくない。それでピーンときた。告白。それを単なる聞くこととして考えれば、君の行動は想像できる」
劇的なことが起こると思っていたのに、そんな誰でもできるようなことを『告白』という言葉で表現されたことに一瞬で冷めてしまった。
「そんなことを聞く事を「告白」だって言うから、こっちは熱くなっただけ損じゃないか」
「そこまで読んでいたんですね。さすがです磯部先輩」
最後の最後まで部長だった祐樹を立てるなんて、未彩は後輩の鑑

である。
「なんか、余計な心配をさせてしまったみたいで、ホントすいません」
平謝りを繰り返す影。
「で、首尾はどうだったんだ？」
「生物だけ、一・二学期とも赤点だったんです。でも、三学期頑張れば解消してくれるって言ってくれたんです」
「はぁ～もうだめだ」
何を思ったのか、深いため息をついた理佳は荷物を持って部室を出て行こうとする。
「どうしたんですか、どこか様子が変ですよ矢神さん」
「もう、足を洗うよ。トラブルバスターは卒業だ」
「いいのか、それで」
影の横を通り過ぎようとする理佳を、新聞部の二人が止めようとする。
「いいのさ、もう潮時なんだよ」
苦笑いを自分に向けて笑ってると、そこへ息を切らした皆本梨花が駆け込んでくる。
「やっ、やっと見つけた影！」
「梨花、どうしたの、そんなに慌てて」
唖然としてしまう影。その慌てている理由が分からない。
「また大げさに言って、他の人を困らせたんでしょ？　まったく、成長しないんだから」
「何だ、こいつのすることが予測できてたのかよ」
全てを見透かしていた梨花に、びっくりする理佳。
「当然です。こいつとは、もう何年になるか分からないくらい一緒だったんですよ、考えくらい見当がつきます」
「そうか、そうなんだ」
何かを確信した理佳は、荷物を下ろしそばにいた一年の皆本梨花の肩を叩く。

「よしっ、今度のトラブルバスターはお前だ！」
「えっ、何ですか、トラブルバスターって？」
「この学校の、全てのいざこざに首を突っ込む、大バカのことさ」
そんな時、元部長の祐樹が一人鼻で笑う。
「思い出した！　トラブルバスターって、あの事件を解決に導いたっていう……」
「導いたも何も、ただの直感であっという間に解決しただけさ。その直感も、あんたにもちゃんとある。あたしの直感がそう告げてるから、間違いない」
「そうですか？」
「ああ、そうさ」
明るく微笑みかけると、のほほんとしている未彩を招き、無理矢理影を含めた三人で手のひらを重ねさせる。
「よ～し、この三人であたし達が卒業したあと頑張るんだ。先輩命令だぞ。必ず果たしてくれよな」
成り行きのまま交わされた重ねた手の上に、矢神理佳は片手でしっかりと絆を固めるように押し込むのだった。

ＥＮＤ

トラブルバスター　ふぁいなる後編（後書き）

この話が最終話となります。個人的には、空白の一話があり完結したという気持ちはありません。でも、一方的に押し付けて終わりとするよりも、どこか抜けている方がキャラクターに深みを与えるんじゃないかなって思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0393f/

トラブルバスター　矢神理佳

2010年10月8日15時45分発行